

## O B 短信



パソコンに魅せられて十二年  
——著書を出版——

戸塚 正 康

私とコンピュータとの出会いは、いまから十二年ほど前、NGUの学生としてアラスカ州立大学フェアバンクス校に留学していた時のことでした。私が翌日提出のレポートをタイプで打っている

と、隣の部屋から妙な音が聞こえてくるのです。何やらタイプらしきものを、学生が必死に叩いているのを見た。これが私がコンピュータを見た最初でした。初めての米国では多くのことに驚かされましたが、大学の寮の中までコンピュータ・ネットワークが引かれていたのを見て、日本の違いを痛感したものです。

それから十二年、コンピュータ業界の編集長を経て、いまでは同業界に携わる編集会社を興し、コンピュータ・ジャーナリストとして業界にどっぷり足を染めて仕事を毎日です。米国の大学から選ばれること十年。ここ二、三年、国内の多くの大学でコンピュータ・システムを導入する機運が高まっています。慶応義塾大学や早稲田大学など著名な大学は、ここ四、五年の間に大量のコンピュータを導入し、専門情報処理教育だけ

でなく、一般学生のコンピュータ・リテラシー向上に躍起になって取り組んでいます。NGUも例外ではなく、早くから富士通のコンピュータを導入し、業務処理やコンピュータ教育に活用していると聞いています。

情報が企業経営の第四の資源と言われる今日、いかに情報を駆使し戦略的な経営に結び付けるかが経営の最重要課題となってきました。NGUでも、コンピュータを自由自在に扱えることが、教授陣だけでなく学生諸氏にとっても必要不可欠な条件となっていることでしょう。また、これから社会に関わる学部卒業生にとって、コンピュータに対するリテラシーを少しでも身につけることが重要な要素になることは間違いありません。

この十年、企業や社会の中に、急速に普及したコンピュータは、経済、社会の生産財として大きく貢献しました。これからは、個人の知的生産財、文化の発酵器としても、大きく貢献していくことでしょう。NGUの学生諸氏はもちろんのこと、いまだパソコンに手を触れたことすらない方には、いまからでも遅くありません。ぜひ一度パソコンを活用してみたいかがでしょうか。

私は、編集という職業柄、日常業務の中でパソコンを触らない日はないほど活用していますが、コンピュータに関わる方の多少の一助となればと思います。昨年末に著書「日本IBMのパソコン新戦略」

「日本工業新聞社刊」を出版しました。もし機会があれば、一読していただければと思います。

一九八二年卒 CRN代表取締役

大学院の設立を

服部 龍彦



内村鑑三は、「ぼくは聖書で食っているが、聖書を食ったことはない」といったという。彼にとっては、「聖書の頒布や伝導を名目に金をもらっている」という意味で、外国のミッションから援助をうけている宗教団体は、「聖書を食っている者」と見たのである。

これからの大学の状況は、内村のいう「聖書で食う」以上の「聖書を食べる」、「大学を食わせる」という覚悟を持つ人材を必要とする時代だと思います。最近、名古屋学院大学の職員のみなさんの顔付が変わったといいますが、動作にめりはりがついた様に見えます。このことは、一人一人が私立大学とは経営するものであるという認識が根付いてきたことの現れです。

もともと資質にめぐまれたみなさんです。その気さえあれば、大学の発展は容易のはずです。

我々名古屋学院大学出身の者は、例えば新聞に母校の記事でものれば気になるものです。ましてそれが良い記事(誉め

た内容)の場合は鼻高々になります。ここ数年、名古屋学院大学に好意的なものが増えたことは非常に喜ばしい事態です。

只今母校は学部も増設され総合大学の様相を見せていますが、今度は大学院でも新設されれば他大学と比較しても遜色のない、いやそれ以上の大学となることは可能でしょう。これだけ大学生の数が増え、しかも他校には無い特色を出せといっても四年間のカリキュラムの消化等を考えれば並大抵ではございません。大学院ができれば先生がたの研究も進み、院生も研究のスタッフとして期待できます。また文部省、他の総合大学の名古屋学院大学に対する評価は高まるはずですが、この頃CJ運動が盛んですが、イメージで人材が集まり、人材が内容の充実につながるならば良い事づくめです。

又新聞をみてはくそ笑みたものです。  
(一九七五年卒 名古屋海外 勤務)

### O B 短信コーナー

このコーナーはOBの方の近況をお知らせするコーナーです。ので、ふるってご応募下さい。